

『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（前）

乾 仁 志

I. はじめに

『初会金剛頂経』すなわち『一切如来真實撰経』（*Sarvatathāgatātattvasamgraha nāma mahāyānasūtra*、以下『真實撰経』と略称する）所説のマンダラに関する作例遺品について、従来は現図の九会マンダラ、八十一尊マンダラ、『五部心観』など、わが国伝来のものしか知られていなかった。しかし最近ではとくにチベットなどに残る遺品を中心として多くの作例が紹介されるようになった。これら遺品については、今後各種の文献と比較して、より総合的な研究が望まれる。

本稿ではこれら遺品と文献の総合研究に先立ち、根本經典である『真實撰経』所説のマンダラについて検討し、本文から確認できる範囲の中で、それらのマンダラの形態および諸尊の構成概要について考察したい⁽¹⁾。

II. 『真實撰経』におけるマンダラの構成

『真實撰経』は金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品という四大品によって構成されている。これら四大品に含まれるマンダラには、各品に所属する部族（*kula*）の諸尊が集められている。すなわち金剛界品のマンダラは如来部、降三世品のマンダラは金剛部、遍調伏品のマンダラは蓮華部、一切義成就品のマンダラは摩尼部というように、それぞれの部族に所属する諸尊によって組織されている。『真實撰経』では、このように部族別にマンダラが編成されているのである⁽²⁾。

次に各四大品に大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印という六種マンダラが説かれている。この六種マンダラは四大品に共通して含まれるマンダラの様式である。この中、大・三・法・羯の四種マンダラは、各部族に所属するすべての諸尊をふくむ広大な儀軌をともしない、それらの諸尊が主として四種の側面から表わされている。四印マンダラは、精進が劣るために、これら四種の広大なマンダラ儀軌を実践することのできない者に説かれたもので、これら四種のマンダラにおける基本的な要素を要略して表わされたものである。一印マンダラはさらにその最略と見なされ、各品すなわち各部族の中核となる尊格によって表わされたものである。注釈などでは、大・三・法・羯の四種マンダラは廣大を欲する者に説かれ、四印マンダラは中間を欲する者に説かれ、一印マンダラは要略

(1)

を欲する者に説かれたものであるとする⁽³⁾。ただし四大品の中、降三世品には教勅マンダラとして、さらに大・三・法・羯の四種マンダラが付加されている。それゆえ四大品所説のマンダラを総計すると、『真実撰経』には計28種のマンダラが説かれていることになる。

また四印マンダラには、金剛界品の場合、毘盧遮那仏のほかに、阿閼仏をはじめとする四仏をそれぞれ中尊とするマンダラも説かれている (§ 592)。他の三品には同様の記述は見えないが、注釈には金剛界品と同じように、四方の主尊をそれぞれ中尊とするマンダラが説かれている⁽⁴⁾。それゆえ注釈にしたがうと、マンダラの数としては44を数えることになる。ただしそれらの様式はいずれも四印マンダラに含まれるので、マンダラの種類としては28種であることに変わりはない⁽⁵⁾。

『真実撰経』ではこれら28種のマンダラについて、金剛界大マンダラなど一部のもの以外は必ずしも統一な名称が与えられていない。そこで本稿では、各マンダラの項目名には「図絵マンダラ」を述べる偈文中に見られる名称を主として採用した。これら四大品所説の28種のマンダラの名称については、すでに堀内寛仁先生の詳細な研究がある⁽⁶⁾。

Ⅲ. マンダラの形態と諸尊の構成概要

『真実撰経』の各マンダラには二つのタイプが存在する。一つは、三十七尊出生段において、スメール山頂の金剛摩尼宝峯楼閣に展開される観想上のマンダラであり、もう一つは、阿闍梨の事業として、灌頂儀礼を実施するに先だって造壇される実際のマンダラである。後者は一般に「図絵マンダラ」と理解されているものに相当し、基本的に前者の投影と見なされる⁽⁷⁾。

『真実撰経』には、マンダラの形態に関して、前者には具体的な記述はなく、むしろ後者にそれが示唆されている。そこで、ここでは『真実撰経』の図絵マンダラの記述を中心に、各マンダラの形態および諸尊の構成概要について考察したい。これらの一部については、すでに梅尾祥雲博士による詳細な研究がある⁽⁸⁾。しかし『真実撰経』の全マンダラに及んでいないので、以下には梅尾博士の解説のある八種も含めて改めて検討することにする。

[A] 金剛界品のマンダラ

金剛界品に現れる諸尊は、部族でいえば如来部に所属する。それゆえ金剛界品のマンダラはまた如来部のマンダラと言われる⁽⁹⁾。一切如来である五仏を中心に、如来部に所属する大乘の主要な菩薩などから組織されている。これら如来部のマンダラとして、ここには大・三・法・羯・四印・一印の六種が説かれている。以下、各図絵マンダラの偈文の記述について確認したい。偈文の記述は主として、1) マンダラの名称、2) マン

ダラの形態、3) マンダラ諸尊の配置、という三項目に分けた。三項目に関する記述以外の説明文が間に挿入されている場合、および諸真言などを省略した場合は、その箇所に () を付してその所在を明記した。

(1) 金剛界・大マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。
[それは] 金剛界のようであり、〈金剛界〉と称される。
(マンダラを画く場合の作法あり。)
- 2) ・四角形にして、四門あり、四つのトーラナで飾られ、
四本の線で結ばれ、繪帛と華鬘で飾られる。
すべての隅(四隅)の部分と門扉のところに、
金剛宝をちりばめて、外輪 (bāhyamaṇḍala) を線引きしなさい。
・その [外輪] の内側の、輪 (cakra) のような、宮殿 (pura) に入って、
金剛線をめぐらし、八柱を飾る。
[その] 金剛柱の勝れたところ⁽¹⁰⁾に、五つのマンダラを荘嚴する。
- 3) ・中央のマンダラの中心に、仏の影像 (buddhabimba) を入れなさい。
仏の一切方(四方)の [月] 輪 (maṇḍala) の中に、
順に四つの最勝三昧耶 [印] (samayāgri) を画きなさい。
・そして金剛歩 (vajravega) によって、四 [方] のマンダラに進み、
阿閼をはじめとする四尊の一切仏を入れなさい。
持金剛 (vajradhara) 等を伴って阿閼のマンダラとなしなさい。
宝生のマンダラは金剛藏 (vajragarbha) 等によって円満になる。
無量寿のマンダラは金剛眼 (vajranetra) 等によって清浄になる。
不空成就のは金剛種々 (vajraviśva) 等によってマンダラが画かれる。
・輪 (cakra) の [四] 隅のところに諸の金剛天女 (vajradevi) を画きなさい。
・外輪の [四] 隅に諸の仏供養 (buddhapūjā) を画きなさい。
・すべての門(四門)の中に四人の門衛 (dvārapāla) を。
・外輪のところに諸の大薩埵 (mahāsattva) を入れなさい。」(以上 §§ 203~206)

1) マンダラの名称

まずマンダラの様式と固有名が述べられている。マンダラの様式は、諸尊を主として大印(尊形)によって表わす「大マンダラ」(mahāmaṇḍala) であるということである。つぎに「金剛界のようであり」(vajradhātupratikāṣa) というのは、このマンダラがスメール山頂に展開された金剛界如来を中尊とするマンダラの投影・反映であり、それと相似なるものであるということである。それゆえこの大マンダラは「金剛界」(vajradhātu)

という名称をもつことが述べられている。次節以下でも、同じパターンでの表現が繰り返されている。

2) マンダラの形態

前半の文は外輪すなわちマンダラの外郭部の説明である。マンダラの外郭は四角形 (catuśra) であること、またその四方にはそれぞれトーラナ (鳥居 torana) によって飾られた四門 (四つの入口 caturdvāra) があること、またその四隅 (koṇa) および門扉 (dvāraniryūha) のところには金剛宝 (vajraratna) がちりばめられていることがわかる。三十七尊出生段の内容と比較すると、この外輪の部分が金剛摩尼宝峯楼閣 (vajramaniratnaśikharakūtāgāra) の外郭部に相当する。

後半の文はマンダラの内側にある宮殿 (abhyantara pura) の説明である。内宮は、その外形が輪に似ている (cakrapratikaśa)⁽¹¹⁾ こと、金剛線 (金剛杵によって線 vajrasūtra) がめぐらされていること、八本の柱 (aṣṭastambha) によって飾られていることがわかる。

さらに金剛柱 (八柱) の内側、すなわち宮殿の内部には、諸尊を安置、あるいは画くために五つのマンダラ (五輪壇 pañcamāṇḍala) が荘嚴される。

以上が本文から知られる金剛界大マンダラの形態である。

3) マンダラ諸尊の配置

前に荘嚴された五つのマンダラ (五輪壇) に、中尊毘盧遮那仏、その四方に最勝三昧耶である四波羅蜜、さらに四仏、十六大菩薩が配置され、つづいて五輪壇に含まれない金剛天女の内四供養、仏供養の外四供養、門衛の四摂、そして大薩埵であるいわゆる賢劫尊が配置される。以上がこの図絵マンダラに説かれる金剛界大マンダラを構成する諸尊である。

図絵マンダラの前に説かれている三十七尊出生段 (五相成身観および十六大菩薩以下の出生段、以下「出生段」と略す) では、五仏、十六大菩薩、四波羅蜜、内四供養、外四供養、四摂という順で三十七尊が現れるが、図絵マンダラの表記では多少順も異なり、さらに賢劫尊が加えられている。

諸尊の詳細な特色については別の機会に譲るとして、ここで金剛界マンダラ諸尊の位置関係について確認しておきたい。図絵マンダラの記述からは、諸尊の位置関係は必ずしも明確ではない。これについては出生段に示唆されている。インドでは方位を示す東西南北は同時に前後左右を意味することは周知の通りである。すなわち前は東、右は南、後は西、左は北をさす。東を前とするのは、その方角が太陽の昇る方向であることと関係すると思われる⁽¹²⁾。さて出生段には、次のように諸尊の位置関係が記されている。

四仏……………釈迦牟尼如来 (金剛界如来) の四方 (catasṛṣu dikṣu) (§ 33)

十六大菩薩……四尊ずつ、一切如来の前 (puratas) ・ 右 (dakṣiṇa) ・ 左 (vāma) ・

- 後 (pr̥ṣṭhatas) (§§ 41, 47, 53, 59, 67, 73, 78, 84, 92, 98, 104, 110, 117, 123, 129, 135)
- 四波羅蜜……………毘盧遮那の前 (puratas)・右 (dakṣiṇapārśva)・後 (pr̥ṣṭhatas)・左 (vāmapārśva) (§§ 140, 143, 146, 149)
- 四内供養……………各四仏のマンダラの左 (vāmapārśva) (§§ 153, 156, 159, 162)
- 四外供養……………世尊の金剛摩尼宝峯楼閣の左の隅 (koṇa vāmapārśva / vāmakōṇa) (§§ 166, 169, 172, 175)
- 四撰……………金剛摩尼宝峯楼閣の各四門の中央 (dvāramadhya) (§§ 179, 182, 185, 188)

この中で四波羅蜜の位置ははっきりしている。すなわち四波羅蜜は図絵マンダラでいう五輪壇の中央の輪壇にあって、中尊毘盧遮那仏の前・右・後・左にあるということである。

この四波羅蜜を出生するのが四仏である。すなわち四仏が毘盧遮那仏（金剛界如来）の所有する一切如来の智慧を成就して、その智慧を印づけるために四波羅蜜を加持する三摩地に入り、それぞれの印（真言）を唱えた結果として四波羅蜜が現れるのである (§§ 139～151)。それゆえ四仏と四波羅蜜はそれぞれ密接な関係にある。ということは図絵マンダラでは四仏は四方の輪壇にあるものの、例えば阿閼と金剛波羅蜜はともに中尊の毘盧遮那に対して同一方向、つまり毘盧遮那の前方あるいは東方に置かれるべき関係にあるということである。この場合、前・右・後・左と、東・南・西・北はそれぞれ一致する。

次に十六大菩薩であるが、上記の図絵マンダラの記述から、出生段に見られる一切如来はそれぞれ四仏に配当されることが予想できる。ただし四仏と各四親近との関係では、前・右・左・後はそのまま東・南・北・西にならない。例として金剛薩埵をみると、その心真言と三昧耶形から分かるように、金剛波羅蜜と不可分な関係にある。ということは、金剛薩埵は阿閼の前において、しかも金剛波羅蜜とつながっていなければならない。つまり一切如来である阿閼の前方というのは、方位で言えば阿閼の西方にあたる。またこのことは、四仏がそれぞれ中尊の毘盧遮那に対面して住していることを示している。さらに十六大菩薩も、出生段において毘盧遮那から三昧耶形を授かる記述があることを考慮すると、毘盧遮那に対面して画かれるのが本義であると考えられる。ただしその後各菩薩が一切如来に対して事業を示す場合には、一切如来である各主尊の四仏の方にそれぞれ向いていると解釈することも可能であろう⁽¹³⁾。なお右繞の法則にしたがっている四波羅蜜と比較して、十六大菩薩がそれぞれの主尊である四仏に対して前・右・左・後と次第するのは異例である。これは十六大菩薩の場合には、前・右・左・後がそのまま東・南・北・西という方位に当てはまらないことを意図しているものと推測される。

以上は図絵マンダラの五輪壇に配置される諸尊である。

次に四内供養は各四仏のマンダラの左とあるから、四方の四仏が中尊に直面していることを考慮すると、例えば金剛嬉女は阿閼のマンダラの左であるから五輪壇の東南隅になる。四内供養を含めて、以上は図絵マンダラでいう、輪 (cakra) のような内宮に配置される諸尊である。

以下はマンダラの外郭部である外輪に配置される諸尊である。まず四外供養は世尊である各四仏によってそれぞれ出生され、世尊の楼閣の左の隅に住するから、この場合の世尊は各四仏に解される。ということは、例えば金剛香女は世尊阿閼の左側の隅にあって、しかも楼閣の左の隅であるから、すなわち外輪の東南隅になる。

四摂はそれぞれが位置する楼閣の各四門の名称から判断される。例えば金剛鉤菩薩は金剛門 (vajradvāra) の中央に位置するとあるから、外輪にある東門に配置される。

図絵マンダラでは、この他にいわゆる賢劫の諸尊が外輪に配置されることが記されているが、具体的にどのような諸尊を配置するのか、ここでは明らかでない⁽¹⁴⁾。

以上、金剛界大マンダラ諸尊の位置について確認したが、このほか出生段のはじめ (五相成身観のおわり) には、金剛界如来 (毘盧遮那仏) は中尊として一切方に面を向けて獅子座に住すること (§ 32)、また十六大菩薩以下の出生段には、五仏を除く諸尊がいずれも月輪 (candramaṇḍala/pūrṇacandramaṇḍala) に住することが述べられている (§§ 34~190)。五仏が月輪に住するかどうかははっきりしない。ただし五相成身観にさかのぼれば、五仏も菩提心を象徴する月輪上の金剛杵から出現したのであるから、月輪に住することは不自然ではない。またこれらの諸尊は尊形が基本であるが、出生段では四波羅蜜のみ三昧耶形の段階にある⁽¹⁵⁾。

(2) 金剛秘密・金剛マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈金剛マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛秘密〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを画きなさい。

- 3) ・すべてのマンダラ (五輪壇) の中心に諸の仏印 (buddhamudrā) を画きなさい。

座 (paryāṅka) に住する仏塔 (caitya) は金剛界自在 [印] (vajradhātviśvari) と称される。

座における金剛金剛は金剛心 [印] (vajracittā) と称される。

座における金剛宝は妙灌頂 [印] (svabhīṣekā) と称される。

座における金剛蓮華は器杖 [印] (āyudhā) と称される。

座における羯磨金剛は一切金剛 [印] (sarvavajrā) と称される。

[これらは] 蓮華に住し、光輪をともなうものとして画かれる。

- 座における金剛、同様に二鉤を立てたものを画きなさい。
金剛に抱擁された金剛と、同様に二つの善哉をなすものを。
火焰のある (karojvala) 宝と、同様に日の印をつくりなさい。
また実に火焰のある (sajvāla) 勝幢と、二金剛の間にある齒列を。
金剛の中に蓮華と、実に火焰のある (sajvāla) 剣を画きなさい。
金剛の輻を有する金剛輪と、火焰のある (karojvala) 舌を。
一切 [方] に面を向けた金剛と、金剛の付いた甲冑を。
同様に金剛牙と、二手による拳印を画く。
- 薩埵金剛 (sattvavajra) 等は [金剛] 界 [大] マンダラにおけるように画かれる。
- 金剛嬉 (vajralāsyā) 等の [月] 輪 (maṇḍala) に [各自の] 標幟印が画かれる。
- そして外 [輪] には規定通り [四外供養と四摂の] 各自の標幟を画きなさい。
- 弥勒 (maitreya) 等の各自の標幟を思うままに画きなさい。」(以上 §§ 345~355)

1) マンダラの名称

様式を示す「金剛マンダラ」(vajraṇḍala) とは三昧耶マンダラのことである。この場合の金剛とは金剛杵に象徴される三昧耶形を指す。わが国伝来の『五部心観』などでは女尊に画かれているが、これはこのマンダラの出生段にあるように、陀羅尼の神格が女性尊として現れることによる (§§ 320~322)。図絵マンダラには、印名としては五仏に対応するもののみが説かれているにすぎない。十六大菩薩に対応する印名については、この直前の出生段に説かれている (§§ 328~336)。それらの名称から知られるように、このマンダラは陀羅尼マンダラである。大マンダラが大乗の主要な菩薩を組織したものであるのに対し、このマンダラは大乗の主要な陀羅尼を組織したものである。固有名の「金剛秘密」(vajraguhya) の金剛とは仏塔や金剛杵などの三昧耶形をいい、秘密とはこれら陀羅尼の神格である女尊 (devatā) をそれらの三昧耶形に隠して表示することをいう⁽¹⁷⁾。それゆえ一般には様式的に三昧耶マンダラという⁽¹⁸⁾。

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては、上記のような説明があるだけである。「大マンダラの方法で」(mahāmaṇḍalayogena) というのは、金剛界大マンダラに説かれた手順で、マンダラを画くべきであることを述べたものである。マンダラを画く場合の作法も含めて、このマンダラの形態も金剛界大マンダラと同様であることを予想せしめる。以下、一印マンダラまでほぼ同じパターンの表現が繰り返されている。

3) マンダラ諸尊の配置

ここではマンダラ諸尊の三昧耶形 (標幟) は、五仏・十六大菩薩・四波羅蜜・四内供養・四外供養・四摂・賢劫尊の順で記述されている。四外供養と四摂の名は直接見えな

いが、前後関係から推定される。出生段では五仏以下、四内供養までの諸尊が同様の順序で現れる (§§ 323~343)。ただし外四供養以下は省略されている。

このマンダラの特徴は、座の上に諸尊の三昧耶形が表示されることである。五仏に関しては、さらにそれらの三昧耶形が蓮華 (padma) に住し、光輪 (prabhāmaṇḍala) をともなうとある⁽¹⁹⁾ (§ 349)。十六大菩薩に関しては、一部の尊の印に火焰を有する (karojjvala, sajvala) ことが述べられている。出生段では、変現された諸尊 (女尊 devatā) は持金剛の形相をもちあまねく火焰を蔵する (samantajvalāgarbhā) とあり (§ 320)、さらに四波羅蜜、四内供養も火焰を有する (sajvalā) とされているから (§§ 339, 343)、十六大菩薩以下すべて同様であると見られる。また出生段では、これら陀羅尼の神格は月輪に住するとあり、四波羅蜜も月輪に住することが述べられている (§§ 321, 339) から、他の諸尊の印も月輪に住するものと考えられる。さらに四波羅蜜については「[金剛] 界 [大] マンダラにおけるように」 (§ 354) とあることから、大マンダラの四波羅蜜は図絵マンダラでは三昧耶形であったことが、これによっても確認できる。なおこの図絵マンダラでは賢劫尊として弥勒 (maitreya) の存在が唯一確認される⁽²⁰⁾ (§ 355)。

(3) 金剛微細・法マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈法マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛微細〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、諸の大薩埵を入れなさい。

- 3) ・金剛の中央に仏 (buddha) を画きなさい。諸の仏のマンダラ (四方の輪壇)

においてもまた [同様である]。

・同様にして胸に各自の印を有する諸の大薩埵 (mahāsattva) が画かれる。

三摩地に住して、二手を金剛縛にする。」(以上 §§ 449~451)

- 1) マンダラの名称

固有名「金剛微細」(vajrasūkṣma) の金剛とは金剛杵をさす。微細とは金剛杵に象徴される一切如来の微細な智慧、金剛智をいう。つまりこのマンダラは、智金剛すなわち金剛杵に象徴される一切如来の微細な智慧を大マンダラの諸尊に対応せしめて表わしたものである。その微細な智慧は三摩地の実践によって得られるものであるから、三摩地智ともいわれる。様式の「法マンダラ」(dharmamaṇḍala) というのは、このマンダラが法印を主とするマンダラであるからで⁽²¹⁾、出生段には「一切如来の智金剛の中において金剛の法性を観察して」 (§ 431) とある。三摩地智である微細な智慧によって如来の金剛の法性を獲得することから名付けられたものであろう。出生段には後に述べるように、変現された諸尊は「各自の心真言の三摩地に入る」 (§ 447) とあり、金剛界大マンダラの出生段などでも三摩地と心真言は密接な関係にあるようである。⁽²²⁾

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては上記のような記述があるにすぎない。若干表現は異なるが、これも前節と同じく基本的には金剛界大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

諸尊の配置に関する記述は、前の二種のマンダラに比べてきわめて簡略である。諸尊の構成については述べられていない。直前の出生段には五仏のほかでは、十六大菩薩に対応する諸尊の存在のみが確認されるにすぎない (§§ 419~447)。その他の諸尊は省略されているものと見られる。

このマンダラの特徴は、仏は金剛杵の中に画かれること、また大薩埵は胸のところに各自の印を有し、両手は金剛縛に結んで三昧相にあることである⁽²³⁾。出生段には金剛薩埵等の菩薩形となること、またそれぞれの標幟を胸のところに置いて月輪に依止すること、さらにそれぞれの心真言の三摩地に入って住することが述べられており (§§ 446, 447)、十六大菩薩に関しては、図絵マンダラとほぼ同じである。金剛杵の中に仏を画くことに関しては、上記の文 (§ 431) に続く箇所 (§ 432) に、三摩地智の心真言として「金剛の中心(軸)にある如来よ、フーン」(vajranābhitathāgata hūṃ) とあり、また図絵マンダラの後に説かれる三摩地印智には「微細金剛の方法によって、金剛杵の中に自身を仏形として観想すれば仏性を得ることができる」とある (§ 481)。

(4) 金剛事業・羯磨マンダラ

1) ・「さてここで最上の〈羯磨マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛事業〉と称される。

2) ・大マンダラの方法で、諸仏の影像 (buddhabimba) を入れなさい。

3) ・金剛薩埵等の方法で、印を有する女尊 (devatā) を画きなさい。」(以上 §§ 519, 520)

1) マンダラの名称

様式の「羯磨マンダラ」(karmamaṇḍala) とは一切如来の活動・行為を表わすマンダラのことで、この場合の羯磨は供養を表わす。「金剛事業」(vajrakārya) とは、一切如来の菩提心である金剛薩埵の供養の事業に名付けられたものである。すなわちこのマンダラは、一般に供養会とも言われているように、一切如来の広大な活動・働き (karma/karman) としての供養 (pūjā) を象徴したものである。一切如来の供養の行為として仏性を与えるのである⁽²⁴⁾ (§ 504)。

2) マンダラの形態

前節と同じように、マンダラの形態に関しては上記のような記述があるにすぎない。これも金剛界大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は、これもきわめて簡略である。諸尊の構成については述べられていない。直前の出生段には、前節と同様、五仏のほかに十六大菩薩に対応する諸尊の存在のみが記されているにすぎない (§§ 494~517)。その他の諸尊はこれも省略されたものと見なされる。

マンダラ諸尊は、五仏に関しては前項に仏の影像 (buddhabimba) すなわち仏形とある⁽²⁵⁾。十六大菩薩に対応する尊格は、金剛薩埵等のようにしてそれぞれの印をもつが、ただし女尊である。出生段では、十六大菩薩に対応する諸尊は各自の印を両手に持ち、月輪に住するという (§ 503)。

(5) 金剛悉地・四印マンダラ

1) ・「さてここで最上の〈印マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛悉地〉と称される。

2) ・大マンダラの方法で、智者は線引きしなさい。

3) ・最初に仏の影像 (buddhabimba) を入れて、四印 (mudrā) を書きなさい。

諸の月輪の中央に金剛印等を書きなさい。」(以上 §§ 569, 570)

1) マンダラの名称

このマンダラは、後の箇所述べられているように、精進の足らないものに、前の広大な四種マンダラに説かれる一切如来の悉地を要略して説かれたものである (§§ 572~576)。様式の「印マンダラ」(mudrāmaṇḍala) は四印マンダラという語が略されたもので、形態的には中尊の四方に金剛杵などの四種の印を配置することに由来するようである⁽²⁶⁾。また固有名「金剛悉地」(vajrasiddhi) とは、金剛杵など三昧耶形は一切如来の悉地を標示することから名付けられたものである⁽²⁷⁾。

2) マンダラの形態

前節と同じように、マンダラの形態に関しては上記のような記述があるにすぎない。「大マンダラの方法で」というのは、前述したように、金剛界大マンダラに述べた手順にしたがって、という意味であり、大マンダラと同様であることが予想される。ただし諸尊の壇の荘厳は異なる。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は簡略である。ただし諸尊の構成は前四種とは異なる。図絵マンダラの記述から、中央に仏が存在し、その周囲の月輪に金剛印すなわち金剛杵などの四つの印をめぐるものであることが分かる。またマンダラを説明するにあたって、金剛手はこのマンダラは、毘盧遮那如来の、一切如来部の大儀軌である前四種マンダラの廣大儀軌に説かれた一切の悉地を集めたものであるという (§ 568)。それゆ

えここでの中尊は毘盧遮那であり、その四方の四印は四波羅蜜の三昧耶形となる。

出生段には五仏も存在するが、本文の後の文に「金剛悉地の四印マンダラのように、四印マンダラの方法で、阿閼等の一切マンダラを画きなさい」 (§ 592) とあり、各四仏を中心とする四印マンダラも画かれるべきことが述べられている。それゆえここには五つのマンダラが説かれていることになる。⁽²⁸⁾

(6) 金剛薩埵・大マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛薩埵〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、外輪を線引きしなさい。
- 3) ・月輪の中に金剛薩埵 (vajrasattva) を入れなさい。」 (以上 §§ 600, 601)

1) マンダラの名称

このマンダラは、一般に一印マンダラと言われるように、金剛薩埵一尊を画いたものである。それゆえこのマンダラの固有名を「金剛薩埵」(vajrasattva) という。様式の「大マンダラ」とは、大印すなわち尊形であることを意味する。⁽²⁹⁾ また本文には、このマンダラは「大乘現証マンダラ」(mahāyānābhisamayamaṇḍala) とある (§ 599)。大乘現証とは金剛界品の正式名でもあるが (§ 617)、それはまた金剛界大マンダラにおいて、十大菩薩の筆頭である金剛薩埵を生起する心真言の名でもあり (§§ 35, 598)、金剛界品の諸マンダラを形成する中核となる金剛薩埵の代表的な性格と見なされる。

2) マンダラの形態

前節と同じように、マンダラの形態に関する記述は上記のようにあるにすぎない。ただしこのマンダラは一尊だけであるから、四印マンダラと同様に諸尊の壇の荘嚴は異なる。

3) マンダラ尊の配置

このマンダラは上記のように、金剛薩埵一尊の尊形マンダラである。本文の後の文にも「満月輪の中に生じた大印を受持して、自身を金剛薩埵と観想すれば速やかに成就する」とある (§ 606)。

以上、金剛界品の六種マンダラについて概観した。ここで上記のマンダラについて整理しておきたい。

- (1) マンダラすなわち楼閣の形態は、大マンダラの記述にあるように、外郭部分は四角形で、その四方にはトーラナによって荘嚴された四門がある。内側の内宮は輪 (cakra) のような形になっており、そこには八柱がある。また大・三昧耶・法・羯磨の四種マンダラでは、八柱の内側すなわち内宮の中に各五仏を中心とする五つ

のマンダラ（五輪壇）が莊嚴される。

- (2) 金剛界品の大・三昧耶・法・羯磨という四種の広大なマンダラに配置される諸尊の構成は、大と三昧耶の二マンダラの記述から見て、五仏・四波羅蜜・十六大菩薩・四内供養・四外供養・四摂の三十七尊、および弥勒をはじめとする賢劫尊からなる。ただし賢劫尊は弥勒以外にどのような諸尊が配置されるのかは本經では不明である。
- (3) 図絵マンダラにおけるマンダラ諸尊の記述順は、大マンダラでは中尊毘盧遮那仏、四波羅蜜、四仏、十六大菩薩、四内供養、四外供養、四摂、賢劫となり、三昧耶マンダラでは五仏、十六大菩薩、四波羅蜜、四内供養、四外供養、四摂、賢劫となり、異なったパターンがある。
- (4) 大マンダラの諸尊は、三十七尊出生段に現れたように、四波羅蜜が三昧耶形である以外はすべて尊形である。三昧耶マンダラの諸尊は、中尊毘盧遮那の仏塔 (caitya) 以下、すべて三昧耶形である。法マンダラの諸尊は、五仏は金剛杵の中に画かれ、十六大菩薩は胸に各自の印を持ち、両手を金剛縛にして三摩地に住する。羯磨マンダラの諸尊は、五仏の尊容に関しては明記されていないが、十六大菩薩は各自の印を両手に持ち女尊になる。法・羯磨の二マンダラには、五仏、十六大菩薩以外の諸尊の存在について明記されていないが、大・三昧耶の二マンダラに準じて配置されると推定される。四印マンダラは中尊毘盧遮那仏の四方に四種の三昧耶形を配置する。また阿閼以下の各四仏を中尊とするマンダラも説かれている。一印マンダラは金剛薩埵一尊を配置する。
- (5) 諸尊の座は、五仏については明記されていないが、他の諸尊は基本的に月輪に住する。三昧耶マンダラには、さらに五仏の三昧耶形は蓮華に住し光輪をともない、他の諸尊の印は火焰に住するという記述がある。
- (6) 中尊毘盧遮那は面を一切方に向けているが、主となるのは前方すなわち東方である。四仏は中尊に對面している。十六大菩薩は三昧耶形を授かる場合は中尊に對面しているが、その後には事業を示す場合は各主尊の四仏に向く解釈も成り立つ。他の諸尊については明確ではない。

[B-1] 降三世品

降三世品に現れる諸尊は、部族でいえば金剛部に所属する。それゆえ降三世品のマンダラは金剛部のマンダラ⁽³⁰⁾、あるいは金剛三昧耶のマンダラともいわれる⁽³¹⁾。金剛界品のマンダラが大乗の主要な菩薩によって組織されているのに対し、降三世品では金剛手すなわち降三世尊をはじめとする忿怒尊によって組織されているのが特色である。降三世 (trilokavijaya) とは金剛手の忿怒尊の性格を表現したものである。大自在天を頂点とする三界主たちに打ち勝つもの、という意味があり、かれら剛悪な有情を教化するため

に金剛手すなわち金剛薩埵が忿怒相に変化して現れた尊格である。本経では金剛吽迦羅 (vajrahūmkāra) とも言う。これは吽という声に象徴されるように、怒りを表現した身相に由来する名である。⁽³²⁾ ただし本経では、この尊格を指す場合はもっぱら金剛手 (vajrapāṇi) という名称が用いられており、金剛薩埵と同様に、金剛吽迦羅と降三世はこの尊格を示す固有名詞として用いられているようである。降三世品には金剛界品と同様に、大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印の六種マンダラが説かれているが、さらに大・三・法・羯の四種の教勅マンダラが付加されている。以下、各図絵マンダラの偈文の記述について確認したい。

(1) 降三世・大マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、一切の成就をなす最勝のものである。

〈降三世〉と名付けられ、金剛から生み出される三昧耶である。

仏の菩提を転じて、すべての悪者を摧滅する。

(桴線の真言あり。)

- 2) ・四角形にして、四門あり、四つのトーラナによって飾られる。

四本の線で結ばれ、繪帛と華鬘によって飾られる。

すべてのマンダラの隅 (四隅) と門扉のところに、

金剛宝をちりばめて、外輪を線引きしなさい。

- 智者は、その [外輪の] 内側を金剛宝で飾り、

四角形にして、四門あり、トーラナをともなう八柱 [を飾る]。

[その] 金剛柱の勝れたところ⁽³³⁾に、五つのマンダラを荘嚴する。

(染色の説明と真言、開門の説明と真言あり。)

- 金 (sauvarṇa) または銀 (rājata)、あるいはよく彩色された土製 (mr̥nmaya) の、四角形の祭壇 (iṣṭaka) に、仏の影像 (buddhabimba) を入れなさい。

(一切如来を鉤召する真言あり。)

仏の前方には火焰の中に (jvālāmadhya) 金剛を入れなさい。

同様に火焰の中に宝、蓮華、種々器杖を画きなさい。

(これら金剛三昧耶印の真言あり。)

- 同様に、金剛歩 (vajravega) によって、仏の前方 (東方) に進み、智者は、儀軌通り、金剛吽迦羅のマンダラを画きなさい。

(金剛歩の真言と説明あり。)

そこで中央に金剛手 (vajrapāṇi) 大薩埵を画きなさい。

輝く青色の大きなウトパラあり、金剛吽迦羅 (vajrahūmkāra) [の相] を持つ。

口から牙を少し露出して、怒りと笑みの面をそなえ、
展左 (pratyāliḍha) によって立ち、火焰の鬘 (jvalamālā) に満たされて光あり。
左足で大自在天 (maheśvara) を踏みつけ、
右足は烏摩妃 (umā) の乳房の上にあるのを画きなさい。

（金剛吽迦羅の真言あり。）

その周囲に諸の金剛忿怒を入れなさい。
怒って牙を露出し、火焰の鬘に満たされて光あり。

（金剛忿怒の四尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって、第二の最上のマンダラに進み、
そこで忿怒自在に圍繞された金剛灌頂 (vajrabhīṣeka) を画きなさい。

（金剛灌頂等五尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって第三の最上のマンダラに進み、
諸の忿怒大我によって圍繞された金剛軍 (vajrasena) を画く。

（金剛軍等五尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって第四の最上のマンダラに進み、
金剛忿怒の衆に圍繞された金剛遍入 (vajrāveśa) を画く。

（金剛遍入等五尊の真言あり。）

- マンダラの [四] 隅には順に
金剛界の方法で、秘密供養 (guhyapūjā) を画きなさい。

（四内供養の真言あり。）

- 金剛歩によって、最上の外輪に進み、
その [四] 隅に四の供養天女 (pūjādevī) をなしなさい。

（四外供養の真言あり。）

- 鉤 (aṅkuśa) 等は四門の中央になしなさい。
• 外輪のところには外金剛部 (bāhyavajrakula) [の諸天] がいる。

（四摂の真言あり。）」（以上 §§ 849～889）

1) マンダラの名称

様式の「大マンダラ」は、金剛界大マンダラ同様、このマンダラが主として大印すなわち尊形によって表わされることによる。「金剛界のようであり」というのは、この降三世大マンダラもスメール山頂で展開された金剛界如来のマンダラに基づくものであり、それと相似なるものであるからである。この表現は教勅マンダラ以外のすべてのマンダラの様式と固有名を述べる際に用いられる定型句になっている⁽³⁴⁾。固有名の「降三世」(trilokavijaya) はもちろんこのマンダラの性格を示すものであるが、金剛手である降三世尊を中心とするマンダラであることを表明している。

次に本文ではマンダラを線引きする評線の真言が説かれる (§ 851)。これは金剛界品では説かれていなかったものである⁽³⁵⁾。

2) マンダラの形態

次に降三世大マンダラの形態について述べられる。金剛界品同様、降三世品においても大マンダラが基本となる。それゆえマンダラの形態に関する具体的な記述がある。

前半の文はマンダラの外輪の説明である。四角形で、その四方にはそれぞれトーラナによって飾られた四門があり、その四隅および門扉のところには金剛宝がちりばめられている。金剛界大マンダラとほぼ同文であり、内容も同じである。

後半の文は外輪の内側の説明である。マンダラの内側は、金剛界大マンダラにおける輪 (cakra) のような内宮とは異なり、その外形は外輪と同じように四角形である。しかも金剛宝で飾られ、その四方には四門があり、八柱はトーラナをともなっている。これによるとマンダラの内側もマンダラの外郭 (外輪) とほぼ同じ構造になっていることがわかる。

外輪には八柱のことは説かれていないが、この文から想像すると、四方にトーラナがあるということは、外輪にも当然それを支える八柱も存在するということになる。このことは金剛界品のマンダラにもあてはまるかも知れない。さらに言えば、金剛界大マンダラの内宮が八柱によって飾られているということは、そこにもトーラナによって飾られた四門が存在すると解釈することも可能になる⁽³⁶⁾。

次にトーラナを支える八柱の内側に、諸尊を配置するために五つのマンダラ (五輪壇) が荘嚴される。この点は金剛界大マンダラと同じである。

以上が本文から知られる降三世大マンダラの形態である。

つぎに染色と開門の説明文がある (§§ 855~858)。これも金剛界品では説かれていなかったものである⁽³⁵⁾。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の位置関係は金剛界大マンダラから予想される。ただしこのマンダラでは、五つのマンダラ (五輪壇) を、順次中央の輪壇から東・南・西・北の輪壇に進むので、金剛界品のマンダラにおける中尊毘盧遮那仏・四波羅蜜・四仏・十六大菩薩、また三昧耶マンダラにおける五仏・十六大菩薩・四波羅蜜という記述順序とは若干相違する点が見られる。その後は金剛界品と同じように四内供養・四外供養・四摂・外金剛部の順で配置される。尊格の性格は異なるが、基本的には以上のような諸尊によって降三世大マンダラは構成される。

さて中央の輪壇の中央には一切如来を配置する (§ 860)。基本的には毘盧遮那如来である。ここではとくに四角形の祭壇が設けられるのが特色である。その四方には四波羅蜜に相当する四種の三昧耶形がそれぞれ火焰の中 (jvālamadhya) に画かれる。

四方の輪壇の中、前方すなわち東方の輪壇の中央には金剛手（金剛吽迦羅）が位置する。または第二（南方）の輪壇の中央には金剛灌頂が位置し、第三（西方）の輪壇の中央には金剛軍が位置し、第四（北方）の輪壇の中央には金剛遍入が位置する。その周囲にはそれぞれ四尊ずつ金剛忿怒が画かれる。これによると、四方の四仏の位置にも、金剛尊すなわち忿怒尊が配置されることになる。これら忿怒尊の主要な尊容の特色は、東方の輪壇の中央に配置される金剛手（金剛吽迦羅）とその四方の四金剛忿怒についてのみ詳説されている。おそらくこの尊容の特色は中央の輪壇以外の他の諸尊にも採用されるものであろう。金剛手（金剛吽迦羅）が大自在天と烏摩妃を踏みつける点は別にして、特に牙を口から少し露出する怒りの相をもつこと、展左によって住すること、さらに火焰の鬘（jvālamāla）あるいは火焰輪（jvālamaṇḍala）に覆われて輝いていること、これらの点は他の金剛尊にも共通するものと見られる。出生段でも、これらの金剛尊は「あまねく火焰を蔵し（samantajvālagarbha）、面は眉をひそめ、眉をしかめ、額に皺をよせて、恐ろしい牙を露出し、金剛の火焰によって火の燃え上がる金剛杵と鉤と剣と索などの武器を手を持つ」（§ 651）と説かれている。そしてこれらの金剛尊は毘盧遮那の周囲の月輪に住するとある（§ 653）。

五輪壇以外では「金剛界の方法で」とあるので、四内供養以下の諸尊も金剛界大マンダラにしたがった配置であることが窺える。ただしその尊容は明確ではない。

なおこのマンダラでは、金剛界品の賢劫尊に代わって、外輪のところに外金剛部の諸天を配置するのが特色である。出生段には、三界主の大自在天を頂点とするヒンドゥー教の神々（deva）を三界主・飛行天・虚空天・地居天・地下天の五類に分類し、二十一天を数える。さらにこれらの神々には妃（devi）がいる（§§ 744～774）。ただしこれらの神々や妃をどのように配置するかは、明確に説かれていない。大自在天と烏摩妃は金剛手（金剛吽迦羅、降三世）の足下にすでに画かれている。

(2) 忿怒秘密・金剛マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈金剛マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈忿怒秘密〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。
- 3) ・五つのマンダラ（五輪壇）のところに秘密印を入れなさい。

- ・この金剛マンダラの中央に仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。
智者は、如法に仏の諸の忿怒三昧耶（krodhasamaya）を画きなさい。
- ・金剛歩によって、金剛手のマンダラに進み、
そこで中央において、横にした戟に住する金剛を画きなさい。
その〔四方の〕火焰の中（jvālamadhya）に如法に順に画きなさい。

金剛と、金剛鉤を。また同様に矢と、喜を。

- 金剛歩によって、第二の最上のマンダラに進み、
そして輪 (cakra) の中に住する金剛宝を画きなさい。
同様に顰眉の中の金剛と、日の中の金剛と、幢と、
同じく金剛における齒列を、その周囲に画きなさい。
- そして金剛歩によって、第三の最上のマンダラに進み、
蓮華の中に住する天妙な金剛蓮華を画きなさい。
また同様に火焰の中に画きなさい、蓮華と剣と輪と、
金剛舌を。如法に、常にその周囲に。
- そして金剛歩によって、第四の最上のマンダラに進み、
横にした金剛に大光のある金剛によって圍繞された金剛を画きなさい。
その一切方 (四方) に、あまねく火焰に満たされて光のある、
一切金剛と、よき甲冑と、金剛牙と、よき拳がある。
- 諸隅と外 [輪] のところには理趣どおりに画きなさい。

(四方の輪壇の諸尊・四内供養・四外供養・四摂の真言あり。)(以上 §§ 996
~1021)

1) マンダラの名称

様式の「金剛マンダラ」とは金剛界品と同様、このマンダラが三昧耶マンダラであることを示している。固有名「忿怒秘密」(krodhaguhya) も同様である。忿怒とは降三世品の金剛部の性格を示す語であり、秘密とはこのマンダラが金剛界品の三昧耶マンダラと同様に、金剛部の陀羅尼の神格である女尊を隠して三昧耶形によって表現したものであることを示している (§§ 991~994)。

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては、上記のような記述があるにすぎない。基本的には降三世大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置は降三世大マンダラと同じである。四内供養以下について詳しく述べられていないが、偈文の後の本文に、四方のマンダラ (輪壇) の諸尊の真言、マンダラ (輪壇) の四隅に配置される金剛舞秘密供養 (四内供養) の真言、外側の四隅に配置される楽器供養 (四外供養) の真言、四門衛 (四摂) の真言がそれぞれ説かれている。基本的には大マンダラに準じた諸尊の構成と考えられるが、ただし、外金剛部についての記述はない。⁽³⁸⁾

このマンダラは三昧耶マンダラであるが、ただし中央には仏の影像が配置される。それ以外は基本的に三昧耶形によって画かれる。また一部であるが、それらの三昧耶形は

火焰の中に (jvālāmadhya) 画かれるとある。出生段でも、変現された諸尊 (女尊 devatā) はあまねく火焰を蔵する (samantajvālāgarbhā) とある (§ 992)。火焰を有するのは、金剛界品では三昧耶マンダラの特徴であった。それゆえ、火焰の中に画くのは他の三昧耶形にも採用されるものと見なされる。ただし前節で見たように、降三世品では大マンダラの諸尊も火焰におおわれている。

なお金剛界品と異なり、四内供養は舞 (nr̥tya) の供養という性格をもち、また外四供養は楽器 (tūrya) の供養という性格を持っている点が注意される (§§ 1019, 1020)。これは降三世品に通じての特徴とも推測される。

(3) 忿怒智・法マンダラ

1) ・「さてここで最上の〈法マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈忿怒智〉と称される。

2) ・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3) ・その中央において、智金剛の中にある仏 (buddha) を画きなさい。

仏の一切方 (四方) に、かの諸の印 (mudrā) を画きなさい。

・金剛歩によって、四 [方] のマンダラ (輪壇) に進み、

降三世 (trilokavijaya) 以下を如法に入れなさい。

それらの一切方 (四方) に、儀軌のとおり諸の金剛忿怒を。」(以上 §§ 1083~1086)

1) マンダラの名称

様式の「法マンダラ」は金剛界品と同様である。固有名の「忿怒智」(krodhajñāna) も同様で、忿怒は金剛部の性格を表わし、智は金剛杵に象徴される微細な智慧を意味する。

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては上記のような記述があるにすぎない。基本的には降三世大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は、金剛界品と同様、前の二種のマンダラに比べてきわめて簡略である。また諸尊の構成について詳しく述べられておらず、四内供養以下が明記されないものも金剛界品と同様である。基本的には、降三世大マンダラに準ずるものと推測される。

直前の出生段には、世尊と四転輪者、および十六大菩薩に相当する諸尊の真言が見えるが、四仏に相当するところが四転輪者になっている点が注意される (§§ 1068~1081)。四仏は降三世大マンダラ以後においては現れない。これ以後のマンダラ儀軌の出生段では、このように四仏に代わって、四仏の各四親近の筆頭である金剛手 (vajrapāṇi) ・金剛蔵 (vajragarbhā) ・金剛眼 (vajranetra) ・金剛種々 (vajraviśva) という四転輪者の

尊格になる。このことはこのマンダラ儀軌の出生段にいたって、より明確になっているが、前節の降三世品の大・三昧耶の二マンダラでも同じであろう。

このマンダラは、金剛界品の法マンダラと同じように、中央の輪壇に位置する仏すなわち毘盧遮那仏は微細な智慧を表わす金剛杵の中に画かれる。ただしその他の諸尊については詳しく述べない。基本的に金剛界品の法マンダラに準ずるものと見なされる。後の文には「火焰の鬘に満たされて光あり」 (§ 1116) とあるので、これも降三世大マンダラと同様の特色のあることが窺える。

(4) 羯磨金剛・羯磨マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈羯磨マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈羯磨金剛〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。
- 3) ・中央のマンダラのところに、仏の影像 (buddhabimba) を入れなさい。

仏の一切方 (四方) に、最勝三昧耶 [印] (samayāgri) を入れなさい。

- ・金剛歩によって、四 [方の] マンダラに進み、

金剛主 (vajranātha) 等の四尊を如法に入れなさい。

それら一切方 (四方) に、諸の大薩埵女⁽³⁹⁾ (mahāsattvi) を入れなさい。」 (以上 §§ 1130~1133)

1) マンダラの名称

ここでは固有名は、忿怒に代わって金剛が用いられ「羯磨金剛」(karmavajra) となっている。金剛はもちろん金剛部を表わす。金剛界品と同様に金剛部の諸尊の活動としての供養を象徴したマンダラであるから「羯磨マンダラ」という。

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては上記のような説明があるだけである。基本的には降三世大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は、これもきわめて簡略である。諸尊の構成については前節同様詳しく述べられていない。出生段には世尊と四転輪者、この後の入壇作法のところには十六大菩薩に対応する真言が説かれているにすぎない (§§ 1122~1126, 1134~1137)。基本的には降三世大マンダラに準ずるものと推測される。

マンダラ諸尊の書き方についての特色は述べられていない。中央の輪壇の中央には仏を配置し、仏の四方に三昧耶形を配置する。また四方の輪壇の中央には金剛主等の四尊を配置し、それぞれ四尊の四方に大薩埵女を配置するとあるだけである。また出生段にも月輪に住することが述べられているにすぎない (§ 1128)。しかしこのマンダラは金

剛界品の羯磨マンダラと同じタイプのものであるから、当然その特色が採用されるものと見なされる。

(5) 忿怒金剛・四印マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈印マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈忿怒金剛〉と称される。

- 2) ・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

- 3) ・降三世 (trilokavijaya) 等 [の印] を仏の周囲に画きなさい。」(以上§§ 1176～1177)

1) マンダラの名称

様式の「印マンダラ」は、金剛界品と同様、四印マンダラという語が略されたものである。固有名は「忿怒金剛」とある。忿怒は金剛部の性格を表わす。金剛はこの場合、金剛杵に象徴される金剛部の諸尊の一切悉地を意味する。

2) マンダラの形態

マンダラの形態に関しては上記のような説明があるだけである。これも基本的は降三世大マンダラと同様であることが予想される。

3) マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は簡略である。金剛界品同様、中央に仏、また仏の周囲には降三世以下の四印が配置される。金剛界品では各四仏の四印マンダラも画かれると述べられていたが、ここでは触れられていない。⁽⁴⁰⁾

(6) 金剛吽迦羅・秘密マンダラ

- 1) ・「さてここで最上の〈秘密マンダラ〉を説明しよう。

[それは] 金剛界のようであり、〈金剛吽迦羅〉と知られる。

- 2) ・大マンダラの方法で、外輪を画きなさい。

- 3) ・その中央に正しく持金剛 (vajrin) の月輪を画きなさい。

金剛をもち、金剛吽迦羅の大印 [と同じように] 手を組み、
展左によって住す。色と姿は如法に。」(以上§§ 1192～1194)

1) マンダラの名称

様式は一般にいう一印マンダラである。金剛界品では「大マンダラ」とあったが、ここでは「秘密マンダラ」とある。他の品の同種のマンダラ名と比較して異例である。注釈では「降三世品に説かれた一切悉地は、[すなわち] 金剛吽迦羅のみで [この] 一切悉地を集めた一印マンダラは、秘密であるから隠したのである」と解釈している。⁽⁴¹⁾

2) マンダラの形態

マンダラの形態については、金剛界品と同様、上記のような説明があるにすぎない。

3) マンダラ尊の配置

このマンダラは、金剛界品と同じく、外輪の中に月輪を画き、その中に金剛手すなわち金剛吽迦羅の尊形を画くマンダラである。降三世大マンダラの同尊だけを表わしたものである。

以上、降三世品の六種のマンダラについて概観した。降三世品にはさらにこれについて教勅マンダラが説かれているが、ここで上記のマンダラの特徴についていったん整理しておきたい。

- (1) マンダラすなわち楼閣の形態は、大マンダラの記述にあるように、外郭部分は四角形で、その四方にはトーラナのある四門（入口）があり、内側も四角形でトーラナによって飾られた八柱があるというように、降三世品では金剛界品と異なり、外側と内側が同形式になっている。
- (2) 降三世品の大・三・法・羯という四種の広大なマンダラに配置される諸尊の構成は、大と三昧耶の二マンダラの記述から見て、基本的に金剛界品と同様であるが、金剛部の忿怒尊によって構成されていることから、四仏は中尊に吸収されて、阿閼の位置に金剛吽迦羅（降三世）が配置されるなど、四仏に相当する尊格も忿怒尊になる。また内供養は舞供養、外供養は樂器供養という性格をもつようになる。さらに外輪には金剛界品の賢劫尊に代わって外金剛部の諸天を配置する。このことは賢劫尊は仏部の諸尊であり、外金剛部の諸天は金剛部に所属するものであることを示唆している可能性がある。ただし外金剛部の諸天をどのように配置するかは賢劫尊同様本経では明らかでない。
- (3) これらのマンダラ諸尊の記述順は、大・三昧耶の二マンダラで共通し、金剛界品とは少し異なって、中央の輪壇から東・南・西・北の輪壇へ順に進む。
- (4) 四仏の名は降三世品以下には直接現れない。代わって四転輪者が現れる。
- (5) 諸尊の画き方は忿怒相である以外、六種マンダラの表現は基本的に金剛界品と同様である。ただし三昧耶マンダラでは中尊の位置に仏の影像を置くとある。
- (6) また金剛界品では火焰を画くのは三昧耶マンダラだけであったが、降三世品では大と法の二マンダラにも記述されている。このことは降三世品の諸マンダラの特徴と見なされる。

(つづく)

註

(1) 『真実撰経』のテキストは、主として堀内寛仁編『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究（梵本校訂篇）』上巻（密教文化研究所、昭和58年）と同下巻（昭和49年）を使用した。以下、本文ならびに註にある§の数字は、この堀内校訂梵本の文段番号を指す。

(2) 金剛界品には sarvatathāgatakula、降三世品には vajrakula、降三世品の教勅には sarvavajrakula、遍調伏品には padmakula、一切義成就品には manikula という用語が主として見られる。この中、manikula に代わって、karmakula という語が教理分に現れる (§ 2559)。『真実撰経』では羯磨部はまだ独立して説かれておらず、この場合も羯磨部とは摩尼部のことを指す。

ところで、摩尼部が羯磨部と呼ばれるのは、一切義成就品の正式名 (sarvatathāgatakrmasamaya nāma mahākālparāja) から領けるが、これは四大品が五部族とは別の組織概念に依拠していることを示している。それは大印・三昧耶印・法印・羯磨印という四印である。四印は四大品の各マンダラに説かれているが、それはまた各四大品に説かれる大・三昧耶・法・羯磨という四種マンダラに対応し、さらに各四大品にそれぞれ対応するというように、『真実撰経』全体を貫く基本的な組織概念になっている。つまり摩尼部を組織する一切義成就品は、四印でいえば羯磨印に対応する。それゆえ一切義成就品は羯磨三昧耶とされるのであり、また摩尼部に代わる羯磨部という語の用例も認められるのである。『真実撰経』において四大品よりほかに説かれなかったのは、この四印という組織概念が厳然と存在したためであり、それ以上は必要視されなかったことによると考えられる。それゆえ部族としては四部族の段階にあり、摩尼部自体が後に分離する羯磨部の要素を含んでいる状態にある。

なお一切義成就品の冒頭 (§ 1861) には vajraratnakula とある。金剛宝はこの品の転輪者でもある虚空蔵菩薩の金剛名 (心真言名) であるから、金剛宝菩薩の部族という意味になる。それゆえ宝部と言っても間違いではないが、『真実撰経』の段階では、摩尼部 (manikula) という語が使用されており、宝部 (ratnakula) とは言わない。この部族を一般に宝部と称するようになるのは釈タントラの『金剛頂タントラ』(Vajraśekharamahāguhyayogatantra Toh no. 480 ; Ota no. 113) 以後のようである。

『真実撰経』の部族説については、堀内寛仁前掲書（下巻）p. 219以下、および堀内寛仁「三十七尊出生段の四種灌頂について」（『奥田慈応先生喜寿記念 仏教思想論文集』所収、平楽寺書店、昭和51年）、また頼富本宏著『密教仏の研究』（法蔵館、1990）pp. 200～215を参照。

(3) Ānandagarbha, *Tattvālokakāri*, Toh no. 2510, Li fols. 217b, 226a etc., および高田仁覚著『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、昭和53年）pp. 395, 412を参照。

(4) Ānandagarbha, *Tattvālokakāri*, Toh no. 2510, Li fols. 225ab (金剛界品)、320ab (降三世品)、Śi fols. 86b, 87a (遍調伏品)、161ab (一切義成就品)。

(5) 堀内寛仁「金剛界九会マンダラの名称について」（『密教文化』88）、同「初会金剛頂経の諸マンダラの名称について」（『密教学研究』2）を参照。

(6) 註(5)堀内寛仁前掲論文を参照。

(7) この二つのタイプのマンダラの性格については、中條賢海「Prakṛti-maṇḍala と Pratikṛti-maṇḍala について」（『豊山学報』32）、および森雅秀「観想上のマンダラと儀礼のためのマ

ンダラ」(『日本仏教学会年報』57)を参照。

- (8) 梅尾祥雲著『曼荼羅の研究』(密教文化研究所、昭和57年 臨川書店復刻)。
 (9) 正確には「一切如来部のマンダラ」(sarvatathāgatakulaṃḍala)とある。堀内校訂梵本 §§ 212, 573, 574, 609を参照。
 (10) 堀内校訂梵本 § 204, 8, には、vajrastambhāgrasamsthendupañcamāṇḍala- とあるが vajrastambhāgrasamstheṣu pañcamāṇḍala- と読む。これについては前田崇『《真実撰経》不空三卷本藏梵難語について』(『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』大蔵出版、1985年) p.927 (156) 以下を参照。

なお「金剛柱の勝れたところに」とは、Tib. 訳にあるとおり「金剛柱の内側に」ということである。

- (11) 輪 (cakra) のような (pratikāṣa) 内宮というのは、基本的に円形と考えられる。円形である点で、菩提心を表わす月輪と対応する。さらには、金剛界品の三昧耶マンダラで中尊毘盧遮那如来の三昧耶形を仏塔 (caitya) とすることとも関係のある可能性がある。
 (12) 『マハーバーラタ』(Mahābhārata, V, 106~109) には、東西南北の方位について次のように説明されている。すなわち東 (pūrva) は世界を照らす太陽 (savitr) が最初に (pūrvaṃ) 昇り、神々 (sādhyā) が苦行を行なったところで、往昔かつて (pūrvatare kāle pūrvam) 神々 (sura) で満たされた地であるから pūrva と呼ばれる。南 (dakṣiṇā) は太陽のヴィヴァスヴァット (光輝) が師に最後の贈り物 (dakṣiṇā) として差し上げたところであるから dakṣiṇā と呼ばれる。西 (pāścimā) は太陽 (sūrya) が午後になって (pāścād-ahah) 日中の光すべてを失うところであるから pāścimā と呼ばれる。北 (uttarā) は人々が罪を赦され (uttāryate)、救済を受けるところであるから uttarā と呼ばれる。この中、太陽の昇る東方は三界、天国 (svarga)、至福 (sukha) へいたる入口 (dvāra) であるという。cf. The Bhandarkar Oriental Research Institute ed., *Mahābhārata, Text as Constituted in its Critical Edition*, Vol. II, Poona, 1972, pp. 1027~1029. および山際素男編訳『マハーバーラタ』第三卷(三一書房、1993年) pp.140~144.

『マヌ法典』(Manu-smṛti, II, 69~104) には、学生期の重要な生活様式(勤行)として朝夕の薄明時におけるサンディヤーの儀式をあげる。朝のサンディヤーは東に向かって、太陽が昇る前からその姿を見せ切るまで規定の作法を行ない、夕のサンディヤーは太陽が没しはじめてからその姿を消すまで行なわれる。渡瀬信之訳『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』(中公文庫、1991年) pp.52~58を参照。

このように太陽は古くから重要な存在であった。とくに太陽の昇る東方を前とするのは、一つに空間的にも時間的にも、東方が一日の始まりを知らせる方角であることとも関係するであろう。『マハーバーラタ』には、東は日 (divasa) と時間 (adhvan) の入口 (dvāra) であると述べられている。そして東方が古代インド人にとって吉祥をもたらす方向として尊ばれるようになったことも重要である。『ラリタヴィスタラ』(Lalitavistara) など北伝系の仏伝では、釈尊は菩提樹下において東方に向かって坐したと伝えている。実際、現在ボードガヤーの金剛宝座にある祠堂も東向きになっている。ヘルマン・ベック著、渡辺照宏訳『仏教』上(岩波文庫、1962年) p.77を参照。

135 『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（前）（乾）

密教経典でも『大日経』までは、東側に本尊を祠って西向きにし、行者は東の本尊に向けて西から拝する。それゆえマンダラにおいても西門から入壇する。しかし『真実撰経』以後、本尊瑜伽という瑜伽行の展開から本尊も行者と同じように東向きになるように考慮されたようである。それゆえマンダラにおいても東門から入壇する。わが国では両部マンダラが本堂の左右に掛けられているが、その場合、右側（東側）に胎蔵マンダラを置き、左側（西側）に金剛界マンダラを置くのは、『大日経』と『真実撰経』ではマンダラの向きが逆になるためである。つまり掛け軸にした場合は、胎蔵マンダラを西に向けて東側に祠り、金剛界マンダラを東に向けて西側に祠るのが正統であるからである。曼荼羅の方位が変化した理由が本尊瑜伽にあることはすでに田中公明氏が指摘している。田中公明著『曼荼羅イコノロジー』（平河出版、1987年）pp. 72, 74を参照。

- (13) Ānandagarbha は四仏ならびに金剛薩埵以下の諸尊は中尊毘盧遮那仏に直面して画かれるべきであるとする。cf. *Vajrodaya*, Toh no. 2516, Ku fol. 31ab.

また Abhayākara Gupta の *Niṣpannayogāvali* では、金剛薩埵以下の十六大菩薩はそれぞれ的主尊である如来に直面し、他の諸尊はマンダラの中尊である毘盧遮那に向くとする。cf. B. Bhattacharyya ed., G.O.S. series no. 109, text p. 46.

- (14) 賢劫尊については、森雅秀「賢劫十六尊の構成と表現」（『インド学密教学研究 宮坂宥勝博士古希記念論文集』所収、法蔵館、平成5年）を参照。

- (15) 四波羅蜜については、田中公明「四波羅蜜菩薩の成立について」（『密教図像』2）、堀内寛仁「初会金剛頂経所説の諸尊について（三）一四波羅蜜一」（『那須政隆博士米寿記念 仏教思想論集』所収、成田山新勝寺、昭和59年）を参照。

- (16) 堀内校訂梵本、上巻P.227の註(4)に指摘されているように、Skt. Ms. のみ svabhiṣekā である。Tib. 訳、漢訳（施護訳）、ならびに Ānandagarbha, *Tattvālokakari* はいずれも svābhiṣekā とする。また金剛智訳『略出経』も「己身灌頂印」とあるから（大正18巻、240頁中）、「自灌頂」(svābhiṣekā) とすべきか。

- (17) cf. Ānandagarbha, *Tattvālokakari*, Toh no. 2510, Śi fol. 176ab.

- (18) 拙稿「金剛界曼荼羅の三昧耶会について」（『密教図像』12）を参照。なお左記の拙論では「密教経典において重要なキーワードである三昧耶という語が、曼荼羅の名称に付されるのは、TS ではこのタイプの曼荼羅に対してだけであり、他のタイプの曼荼羅に対してはまったくみられない」と指摘したが、これは誤りであるので訂正しておきたい。ただし三昧耶という語がとくに三昧耶会と密接な関係にあることには変わりはない。

- (19) これら蓮華座と光輪を有するという特色は、Ānandagarbha の *Vajrodaya*, *Tattvālokakari* では大マンダラの五仏にも採用されている。cf. Toh no. 2516, Ku fol. 31a, および Toh no. 2510, Li fol. 113a.

また Abhayākara Gupta の *Niṣpannayogāvali* では大マンダラの毘盧遮那以下のすべての諸尊に採用している。cf. B. Bhattacharyya ed., *op. cit.* p.46.

なお大マンダラの大印の文段 (§251) で、仏を成就する時に「金剛日」(vajrasūrya) を成就すべきことが説かれている。Śākyamitra, Ānandagarbha とともに、これを光輪 (ḥod kyi dkyil ḥkhor) とし、Śākyamitra はとくに光背 (ltag paḥi thad kar ḥod kyi dkyil ḥkhor) と

説明している。cf. Toh no. 2503, Yi fol. 105b ; Toh no. 2510, Li fol. 145a.

(20) 註(14)森雅秀前掲論文を参照。

(21) cf. Śākyamitra, *Kosalālamkāra*, Toh no. 2503, Yi fol. 153b. ; Ānandagarbha, *Tattvāloka-kari*, Toh no. 2510, Li fol. 198a.

(22) 堀内校訂梵本 §§ 34-190に見られるように、金剛薩埵以下の諸尊の出生は、仏が三摩地に入ると、まず心真言が現れる形式にある。また大マンダラ儀軌に説かれる五仏の法印は vajrajñānam (金剛智) とある (§ 278)。

このマンダラの意味については、松長有慶博士によって重要な指摘がなされている。すなわち法マンダラとは、実在の本源的な声、コトバを表現しようとしたマンダラであり、また微細という語は、実在の根源的な光を意味する清浄光明を内容とするものである。つまり宇宙の根源を声と捉え、また一方では光とみて、それを象徴しようとしたのが、この微細な仏の知恵を表現したマンダラであるという。詳しくは松長有慶「金剛界の微細会と供養会について」(『密教文化』162、所収)を参照。

(23) Śākyamitra, Ānandagarbha とともに、大薩埵の場合も「同様にして」(tathā) とあることから、それらの尊も仏と同じように金剛杵の中に画かれるとする。さらに Ānandagarbha は、大薩埵のところに記されている「胸に各自の標識を有し、三摩地に住して、二手を金剛縛にする」という点を仏以下にも採用している。cf. Toh no. 2503, Yi fol. 154a ; Toh no. 2510, Li fol. 198b.

(24) 松長博士によれば、このマンダラの性格を表わす供養とは、活動、運動をあらわし、実在の本源的なエネルギーを象徴するものであるという。詳しくは註(22)松長有慶前掲論文を参照。

(25) Śākyamitra, Ānandagarbha とともに、五仏は金剛界大マンダラに説かれたように画くとする。cf. Toh no. 2503, Yi fol. 164ab ; Toh no. 2510, Li 210b.

(26) cf. *Kosalālamkāra*, Toh no. 2503, Yi fol. 173b.

(27) 堀内校訂梵本 § 42では、金剛薩埵の三昧耶形は「一切如来の悉地金剛」(sarvathāgatasiddhivajra) といわれる。

(28) 本稿 p. 157および註(4)を参照。

(29) なお堀内校訂梵本に指摘されているように「大マンダラ」とするのは Skt. Ms. のみで、他は「薩埵マンダラ」あるいは「大薩埵マンダラ」とする。詳しくは同書、上巻p.311を参照。

(30) 本文には vajrakula~maṇḍala とある。cf. 堀内校訂梵本 §§ 995, 1082, 1087 etc.

(31) 金剛三昧耶 (vajrasamaya) とは降三世品の正式名でもある。cf. 堀内校訂梵本 §§ 657, 735, および1455.

(32) 註(5)堀内寛仁前掲論文を参照。

(33) ここ (§ 854) も vajrastambhāgrasamsthendupaṅcamaṇḍala- とあるが、vajrastambhāgrasamstheṣu paṅcamaṇḍala- と読む。註(10)を参照。

(34) 教勅マンダラは『真実撰経』の他のマンダラと形態が異なる。cf. 堀内校訂梵本 §§ 1262-1267, 1350, 1387, 1439.

(35) 『金剛頂瑜伽中略出念誦経』(大正18巻、866番)や *Vajrodaya* (Toh no. 2516) といった金

剛界大マンダラ儀軌では、これらの要素が組み込まれている。

- (36) Ānandagarbha はこの降三世大マンダラ儀軌に説かれるマンダラの形態を金剛界大マンダラにも採用している。cf. *Tattvālokakāri*, Toh no. 2510, Li 112a.
- (37) Śākyamitra, Ānandagarbha とともに、弥勒等の賢劫尊も加えている (cf. Toh no. 2503, Yi fol. 205ab ; Toh no. 2510, Li fols. 256b~258a)。しかし『真実撰経』の降三世品では賢劫尊について触れておらず、金剛界品と同様に賢劫尊を加える意図があったかどうか疑問である。
- (38) Śākyamitra, Ānandagarbha とともに、大マンダラと同様に弥勒等の賢劫尊を加えている。外金剛部については、後に教勅マンダラで説明されているから、ここには画かないとする (cf. Toh no 2503, Yi fol. 222b ; Toh no. 2510, Li fol. 286b)。なお次節の法と羯磨の二マンダラに関して、Śākyamitra は賢劫尊および外金剛部について触れないが、Ānandagarbha は羯磨マンダラにおいて弥勒等の賢劫尊の存在に触れている (cf. Toh no. 2510, Li fol. 301b)。
- (39) 堀内校訂梵本、上巻 p. 464の本文 (§1133) では *sattva* であるが、同註(2)に指摘されている Skt. Ms. の原本である S 本の *sattvi* が本来のものと考えられる。
- (40) 本稿 p. 157および註(4)を参照。
- (41) 註(5)堀内寛仁前掲論文を参照。cf. *Tattvālokakāri*, Toh no. 2510, Śi 322a. なお Śākyamitra は要略のマンダラであると説明するのみである。cf. *Kosalālakṣmīkāra*, Toh no. 2503, Yi 243b.

本稿は平成7年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）による研究成果の一部である。

〈キーワード〉『真実撰経』、金剛界マンダラ、マンダラ